落下るゆゑ、不意をうたれて逃んとすれば、軟なる雪深く走りがたく、十人にして一人助るは稀也、幾十丈の雪、人力を以て掘ることならざれば、三四月にいたり、雪消ての、ち、死骸を見る事あり、ほふらを處によりて、をほてわや、あわはたりともいふ、山家にてはなだれほふらを避んため、其災なき地理をはかりて家を作る、ほふらに村などつぶれたる奇談、としごろ聞たるがあ、またあれど、うるさければ玄るさず、

〔閑田耕筆〕近江彦根の陪臣大菅中養父、其主の領地を撿する時、或山家にて不納を責るにつき、其家の後山に林繁茂せるを見付、是を伐剪て代なさば、かく未納にも及ぶまじきをと咎む、農夫いなこれなくては、あわのふせぎいかにともすべからずといふ、それは何の事ぞと問しに、雪はつもる物也、あわはつみて崩るゝものなれば、林をもて防がざれば、家をうちたふすなりと答へけるに、中養父は古義を好む人なれば、はじめてさとりぬ、萬葉集に、ふる雪はあわになふりそ吉張のゐかひの岡の塞ならまくに、とあるも、正しく是にて、あわはふりて崩るゝ故に、塞となりがたければ、あわにはふることなかれといふ也けりといへり、凝雪は水氣ある故によくつむ、あわは密雪に充べし、寒至て強き故に水氣盡て輕し、されば、あわとはいふならんと、上田秋成は釋せり、つねにあわ雪はふるほどなく消る春の雪とのみおもへり、それにても萬葉の歌聞えざるにはあらねど切ならず、これらも夏に失て夷にもとむるといふべし、

〔夫木和歌抄十八雪〕承安二年十二月、東山歌合連日雪、　大炊御門右大臣家佐

こしの山たてをくさほのかひぞなき日をふる雪に玄るし見えねば

深山雪を　同

はつ雪の玄るしのさほはたてしかどそことも見えずこしの玄ら山

〔世事百談〕雪の竿　信州越後北陸など、雪の深さを知るに、棹に一丈までの寸を、竿に刻みて、水の

雪棹